

<講演>山上国際学寮

真珠湾攻撃後 80 年、今、伝えたいこと …… 個人的談話

ジョージ・W・ギッシュ・Jr.

(本稿は、2021年6月18日に行われた山上国際学寮主催講演会の内容にギッシュ先生が加筆されたものです。)

去る2020年は日本にとっては、大変重要な年と期待されました。特に、夏に東京オリンピックとパラリンピックが開催される予定でした。そして、もう一つ記念すべきことは、戦後75年の年でもありました。

人間は、未来に何が起こるか今の時点では、見えません。例えば、21世紀の初めに、多くの人が明るい希望を抱きました。20世紀の様な悲惨な世界大戦二つが起こって、抑圧や差別によって人権がひどく侵された時代が変わって、新しい世紀に人間が違いを乗り越えて、お互いに協力し合って、21世紀こそが「平和の世紀」になると願いました。

その夢に反して、戦争が止まらないで、難民の数が記録的な数になって、地球の生命体が益々犯されている中で、今起っている新型コロナウイルスのパンデミックに人類が脅かされています。

この大きな渦の中で、ともすれば、一人の人間が何も出来ないという絶望感に落ちてしまいます。この時こそ、教育が大切です。もちろん本から得る知識が大切ですが、出来れば、色々な現場を訪ねて、様々な人の話を直接聞くことが大事です。修学旅行による学習は「体験教育」そのものです。

去る2020年の時点で、75年前の第二次世界大戦の証言者の平均年齢は83歳となっているそうです。実は、その時私の年齢は83歳でした。アメリカでは、終戦を記念する日は、日本が無条件降伏した9月2日です。その日を「V-J Day」、つまり日本に勝利した日として記念することになっています。その前の5月8日にドイツが無条件で降伏した日を「V-E Day」として祝いました。ヨーロッパ大戦の発端は1939年9月1日のナチドイツ軍によるポーランド侵略でした。そして、皆が覚えている1941年12月8日、日本の真珠湾攻撃によってアジア・太平洋の大戦の発端になりました。つまり、日中戦争を戦っていた日本は米英など連合国

との全面戦争に突入したのです。

その1941年の12月5日の日は、わたしの5歳の誕生日でした。そのすぐ後のアメリカの時間の12月7日（日）に真珠湾攻撃を受けて、翌日8日ローズヴェルト大統領の戦争布告演説を私たちはカンザス州の田舎の家で当時大きな電池が付いたラジオで聞いた後、お父さんが真剣に言った言葉を未だに覚えています。

“ It's war ! ” 「戦争だ ! 」

「良心的兵役拒否」

そして、私は1954年12月、18歳になった時、アメリカの徴兵制度の登録義務に従いながら、同時に良心的兵役拒否者であることを表明しました。その後、知らない内に1年以上にわたり、私の背景についてFBI（アメリカ連邦捜査局）の徹底的調査が行われていました。

その調査が終わるとカンザス州管轄区域の連邦裁判官のもとに出頭しなければならなかった。その時も最初の地方登録局の面接と同じように一人で迎えました。が、「あなたは女の子の遊びが好きだったでしょう」「この国を愛せなければ、よその国へ行け」の様な3人の地方局員の侮辱的な言葉と違って、裁判官が言われたのは、「私が裁判官だが、人の心の中までも見ることはできない。これは良心の問題である以上、私が判断しにくい立場にいることを理解してほしい。」そして「総合的に見るとあなたの今までの行動と良心的決断には矛盾を感じません」と言われて、兵役に代わる二年間の奉仕活動の法的申請が出来るようになりました。

実は、1956年の夏、ヨーロッパにあるオーストリアのヒトラーの出身地リンツという都市の難民救援ワークキャンプに参加した後、その継続プロジェクトに志願しましたが、大学を卒業するように勧められました。結果的に、1958年に兵役に変わるために私が望んだ奉仕先と違った、日本に派遣されることになりました。そして、その時の「良心的兵役拒否」という決断がなければ、私は今、この日本にいないだろう。

歴史的に見ると、20世紀に良心的兵役拒否制度が真剣に取り上げられたのは、あの物凄い残酷さと恐ろしい破壊がもたらした第一次世界大戦の反省の時でした。私が生まれた1936年には、アメリカだけで1,200万人ほどの平和主義者がいました。あの戦争は「全ての戦争を終わらせるための戦争！」とよく言われたにも関わらず、何故、より残酷な第二次世界大戦が起こってしまったかと思うと人間は

いかに愚かな者かと結論せざるを得ない。

日本では「戦後」という表現をよく聞きますが、本当に戦争が終わったのでしょうか。今の日本の国土で軍隊対軍隊の戦争がなくても、世界のどこかで武装グループによる争いや民族対民族の戦いがまだ続いています。現在、米軍だけの基地が160ヶ国ほどに存在するし、アメリカの年間総合軍事予算は約100兆円と報道されています。未だにその予算が毎年増えています。軍事的な戦争がなくても、あらゆる暴力が続く限り、本当の平和な社会と言えるのでしょうか。目に見えない言葉や精神的な暴力が別の意味で人を殺すことが出来ます。いじめなどの「小さな戦争」が毎日起こっている限り、平和な社会は成り立ちません。この個人的レベルと同時に、民族及び国家の共同体的な戦争責任のレベルまで、私たちみんなが共に真剣に検証すべきです。

私が研究している琵琶音楽にしても、近代日本のナショナリズムに利用された事実もあります。すべての国の文化史を見直しながら、人間らしく生きるためのあらゆる障害から解放されることが平和への道です。戦争の原因となる様々な問題を乗り越えなければ平和の実現は不可能です。平和を実現するために、それを束縛するあらゆる課題と取組んで、お互いの過ちを認め合って「生きるための平和教育」が大前提です。

平和学習

私は、2020年7月12日に山梨平和ミュージアムの講演の中で強調したのは、いかに「平和教育」が大切であるかということでした。2019年に、私が理事長と院長として勤めた山梨英和学院の130周年記念展示会が山梨県立図書館で開催された時、見に来た英和の女子高校生徒たちに聞きました。

「英和の歴史の中で、いつの時代に一番関心がありますか？」と尋ねたら何人かが「戦争の時」と答えました。その時私が思ったのは、「もし、戦争の時代に関心があれば、出来るだけ当時の証言者に直接聞くことが大切である」ことでした。今の若い世代が最後に直接に聞くことが出来る世代であるのです。今の学生には是非勧めたいことは、そういう「戦争証言プロジェクト」を実現することです。その準備のために、先ず、近く戦争と平和の史料館を見つけて、出来るだけ何回も足を運んで、ゆっくりと調べて、その内容を自分のものにすることが大切です。

例えば、甲府にある山梨平和ミュージアムでは、75年前の甲府空爆の詳しい資料が展示されています。何処からどういう飛行機が飛んできたか、どんな爆弾が

落とされたのか、どの辺で被害があったか、その時、山梨英和の校舎や生徒たちに何が起こったか、調べることが出来ます。

同じように、他の地域の若い世代も、近くの戦争と平和史料館に足を運ぶことが出来ます。沖縄から北海道まで、地元の良心的な証言者たちの努力によって第二次世界大戦の資料を整理し得て、今まで保管してきましたが、殆どの場合人手不足と経営に苦しんできました。これから、次の世代に責任を取ってもらわないと、その証言が消えてしまいます。参考のために、全国にある平和資料館のリストを調べてください。<https://sensotoheiwa.web.fc2.com/>

「加害者」と「被害者」

数年前に、アメリカの教会の地域婦人会の学習会で日本を紹介するように頼まれました。ある日、丸木さんたちの「広島原爆の図」のスライドを上映した後で、鋭い質問が出ました。「日本人は、特に日本のキリスト者は真珠湾をどう思っていますか?」。要するに、戦争を語る時に、日本人は、「被害意識」が優先するという批判を良く聞きます。丸木さんたちの原爆図に対しても、同じ様に批判されました。そして、今、埼玉県にある「丸木美術館」を訪ねると、「沖縄戦の図」と「南京大虐殺の図」なども展示されています。その上、今、問題になっている地球環境破壊の課題の前兆となった「水俣の図」も描かれています。皆さんも出来れば、丸木美術館をゆっくり見学してください。

戦争を考えますと、殆どの場合、どの国でも、「加害者」と「被害者」の区別が出来なくなります。この点に関しては、山梨平和ミュージアムでは、甲府の爆撃による「被害」だけで終わらないのです。あの戦争になるまで、日本が通ってきた道とそのなかの誤りを詳しい史料で説明する。その内容がすべての若い人たちが把握することによって、自分たちの「平和教育」の基礎学習のために役に立ちます。その上で、あの時代を経験して、生き残っている証言者の話を直接聞くことも大事です。

その証言の中で、被害者としての痛みと怒りもあります。自分の町のことであれば当然同情しますが、もしも相手の被害は自分の国の加害によるものであった場合、その痛みや怒りを聞き入れることが辛いですが、その出会いを通して、自分の偏見や思い込みなどの先入観と固定概念に直面することが出来ます。お互いの痛みと怒りを共有することこそ、相手と共に新しい未来を作り出すことが出来る前提です。この作業の中で個人的な改善と同時に、社会的変化が可能になります。

そして、このような学習を踏まえて、自分たちのこれからの人生において、その学びを具体的な行動で活かすことが一番大切です。

個人的体験

この講演の現在時点、第二次世界大戦の証言者の平均年齢は84歳になりました。実は、私も2020年12月に84歳になりました。私が小学校一年生になった時、日本とアメリカはお互いの敵国でした。

私の家族が引っ越ししたばかりの家がアメリカの真ん中にあるカンザス州の田舎の町でしたが、時々“Blackout”、いわゆる「灯火管制」を経験しました。夜になると一つの光でも日本の飛行機から見えるとのことで、安全のためにすべての光を消さないと言われました。それだけで、こどもに恐怖感が与えられました。私と弟が毛布の下にもぐって、「懐中電灯をつけたら大丈夫かしら」と真剣に声かけあったことの記憶があります。

今から考えると、その時の“Blackout”は、ある種の戦争中のプロパガンダだったかもしれません。

敵は悪魔的な恐るべき者であると国民に植え付けることがなければ、その敵を殺すべき相手であると説得出来ません。

その頃アメリカでは、日本人は“Jap”と言われていました。そして、日本では、アメリカ人などの敵国は鬼畜米英と言われたそうです。アメリカ人が恐ろしいことをするからサイパン又は沖縄などでは、大勢日本の民間の方々が自殺に追われた事実があります。そして、アメリカ人が出来るだけ大勢の“Japs”を殺すことによって、戦争が終わると信じました。相手は人間であると考えたら、簡単に殺し合うことが出来なかったはずです。

その意味において、イエスの言葉は大切と思います。ルカ6：27

“Love your enemies, do good to those who hate you.”

「敵を愛し、あなたを憎む者に良いことをしなさい。」

日本空襲と地元のカンザスと日本との関係

約75年前に、私はSalina（サライナ）、Kansasに住んでいました。その町の大学でお父さんが3年生でした。そして、私は小学校3年生でした。その町の南側には、米陸軍空軍の広い“Smoky Hill Army Air Force Base”という基地及び訓練所がありました。

日本を爆撃するための B-29 乗組員の殆どはこの Smoky Hill で訓練されました。そして、それより南にあるカンザス州の一番大きい町、Wichita の飛行機製作場でその B-29 が製造されました。要するにその地方の広い平野の地形は飛行機の製造と訓練に最も適したところでした。今から考えると日本人から見れば、アメリカの一番嫌われる地域でした。

時々、Salina の近くにあったその陸軍空軍基地で一般人に公開されたイベントが行われました。そのイベントに私たちの家族が見に行った記憶があります。実物の B-29 の飛行機を間近に見る機会があったが、「こんな大きな飛行機が本当にとぶのだろうか？」とつぶやく大人たちの言葉も覚えている。

見物に来た皆が夢中に飛行機などを見ているうちに、私が普段と違う建物の近くに歩いていきました。その場所から不気味な叫び声が聞こえてきた。動物の吠える声とも人間のうめき声ともつかないその苦しそうな声は、実は戦場で恐怖のあまり精神に障害を負った兵隊たちが収容されていた格子のはまった建物から伝わってきた叫び声であった。彼らは、“Shell shock” いわゆる戦場のショックによる被害者たちでした。

好奇心にかられて、その建物の裏に回ってのぞいてみると、人間らしいものが大きな檻の中で、走りまわって、登ろうとしている姿が間近に見えた。その檻から逃げようとする、まるで獣同然だった。私は、子ども心に、見てはならない最も重症 “Shell shock” を受けた帰還兵の姿を見てしまったと思った。(最近まで知らなかったのですが、ドイツ捕虜もいたそうです。)

そして、1944 年のある夏の日、その Smoky Hill 基地から若い兵士が乗っている車が私たちの家の近所までドライブに来ました。私の記憶によると小学校 3 年生になる前の私と幼稚園の弟 Glen が、その日、近くの小学校に遊びに歩いたところ、その方から声が掛けられました。「この町の一番美味しいアイスクリームの店へ食べにいきましようか?」。何回も同じようにその方が遊びに来ました。そして、ある日から、その方が遊びに来なくなりました。その方の名前を覚えています。Douglas Northrop でした。

その後、時々その方から手紙が届きました。日本を爆撃するために遠い Saipan まで来ている。当時のサイパンの環境などの内容もありました。一般の民間人の中には、フィリピン人と韓国人もいました。一番多い地元のチャモロの人たちは “most friendly people” と書きました。東京等の爆撃の報告もありました。そして、1945 年 5 月ごろ、その Douglas Northrop の両親から別の手紙が届きました。Douglas Northrop が乗った飛行機が墜落されて、彼が行方不明になったことが知らされました。8 歳の私にとっては大きなショックと何とも言えない悲しみでした。

今も、その出来事を思い出すと、同じ悲しみが湧いてきます。私だけではないと思います。どこの国でも、戦争の傷は、子どもが一番敏感です。私の悲しみの傷に比べて、日本中 B-29 の爆撃を経験した子どもたちの傷が何倍も深いと思います。

あの当時の映画館でマンガなどの合間に Movie Tone News が流れて、その中で、必ずアメリカの兵隊たちが軍歌に合わせて、英雄として隊列を組んで行進していました。しかし、Douglas Northrop のことを考えると、兵隊たちは英雄として行進するものとはほど遠い、みじめな死へ向かっていくと思うようになりました。

最近、インターネットで調べてるうちに、その Northrop さんのことについてもっと詳しい事実を発見できました。本人は、コネティカット州 Fairfield County (フェアフィールド郡) 出身でした。高校生の時、地元の子どもたちを集めて、地域の小学校のグラウンドで野球などのスポーツを訓練させました。その地域の人気若いリーダーでした。今も、その地域のリトルリーグ野球連盟が彼を記念するために「Douglas C. Northrop Little League」と名付けられている。

その Little League の記録によると、Northrop 氏が 1943 年頃、18 歳の若さで米軍空軍に入隊しました。(しかしながら、この講演の直ぐ後に、彼の歳の真実が見つかりました。彼は 1913 年 7 月 2 日生まれでした。そして二つの写真もありました。一つはエール大学生の時ともう一つの普段着の軍服姿です。(下に追加しました。)この新しい情報が正しいと思います。というのは、19 歳の若さで、志願兵が少佐という位を獲得することは不可能です。普通は、大学卒業後、特別訓練などを通さないと米軍の将校になることは出来ません。)

1943 年頃、米軍は太平洋作戦のために B-29 の製作とその部隊を訓練することは急務でした。Northrop 氏が入った部隊は第 499 爆撃大隊でした (499th Bombardment Group)。そして、1944 年 1 月にその Group の Commander (司令官) になりました。

その部隊は、先ず、1943 年 11 月にアリゾナ州ツーソン市の近くの米陸軍空港に編成され、1944 年 4 月までに全部隊が訓練のためにカンザス州 Salina の Smoky Hill Army Air Field という米陸軍空港基地に移動されました。(その当時、アメリカの空軍は米陸軍本体に組織されました。戦後、航空軍として独立するまで「Army Air Force」でした。) 3 か月の猛訓練が終わると全部隊がマリアナ諸島のサイパンに派遣されました。Douglas Northrop が戦場へ向かう前に、そのカンザス州の暑い夏期間に私たち兄弟と共に冷たいアイスクリームを味わいました。その思いは今も懐かしく抱えています。

最近分かったもう一つの記録によると、1944 年 1 月 22 日に Major Douglas C. Northrop がその部隊の Commander になりました。要するに、彼はもうすでに

Major という「少佐」の位を獲得したのです。そして、彼の優秀なリーダーシップと能力が認められ、その部隊の司令官と任命されました。私と弟のこどもの目から見ると、彼はただ優しい若い青年でしたが、今から考えると、やはり、司令官という地位があったから、車で基地から自由に街まで出かけることが出来ました。

彼が属した第499爆撃大隊(Group)には、四つのSquadron(爆撃中隊)が組織されました。(最終的には、戦場ではその499th Groupは三つの中隊に編成されました。)Northrop氏の中隊は877th Bombardment Squadronでした。そして、彼も、その中隊の司令官でもありました。

各中隊(Squadron)は10機から15機のB-29とその11名の乗組員で組織されました。Northrop氏が率いた第877爆撃中隊を含む第499爆撃大隊(Group)は、第73爆撃連隊(73rd Wing)の隷下で組織されました。Douglas NorthropのGroupは、1944年9月18日にサイパンのIsely Field(アイズリー飛行所)に到着しました。その上にあったXXI Command(第21司令部)が1945年1月まで、General Haywood S. Hansell(大將)の指揮の下でサイパンの空軍基地から日本の重要な軍事的工場などを真昼に高い高度から爆撃しました。

その中で、標的となった主な軍機機械工場は東京近辺の武蔵工場や名古屋の三菱工場でした。私と直接関係があるのは、1945年1月23日の名古屋北部の爆撃でした。その日の日本の記録は次の通りです。

1945(昭和20)年1月23日

午後2時半頃、約70機のB29が名古屋北部、三菱発動機を爆撃。焼夷弾投下、瀬古地区被災。

被災家屋3戸、被災者13名

守山区は南に矢田川を挟んで三菱重工業名古屋発動機製作所(名古屋市東区、現ナゴヤドームを含む一帯)、名古屋陸軍造兵廠千種製作所(名古屋市千種区)、庄内川越し北に造兵廠鳥居松製造所(愛知県春日井市)、東に瀬戸地下軍需工場(愛知県瀬戸市)と多くの軍需工場が有りそれらに働く従業員が大勢住んでいた。

当時日本の航空機エンジンの約40%を生産していた三菱発動機への空爆はそのため執拗に繰り返され、守山区への空襲はこれら工場群への空爆の余波といった感がなくもない。



当時日本の航空機用発動機の内四割以上を生産していた三菱重工業名古屋発動機製作所は、1944年（昭和19）12月13日から翌年2月にかけて大幸工場（現在のナゴヤドームを中心とした一帯）が4回、大江工場が2回の爆撃を受けた。写真は終戦直後米軍によって撮影された大幸工場の東一帯の航空写真（現名古屋市東区砂田橋一帯）。

写真中央、東から西へ流れる矢田川。左岸（南、写真下方）に広がる大幸工場東の工場群。度重なる空襲により工場は破壊された。写真の点々とする黒丸は爆撃の跡。矢田川右岸（北、写真上方）に広がる守山地区もこの余波で空襲を受け、爆撃の跡が所々残る。

実は、私が1958年に3年短期宣教師として派遣された先の大幸町のキャンパスは、戦後この三菱発動機製作所（上の写真の下の三角部分）の跡地に移転された名古屋学院でした。その一角にある教師寮に私は生活しました。その同じ場所の上に、Douglas Northrop が乗ったB-29が飛びました。そして、その場所を爆撃しました。なんという偶然の悲劇でしょう。その1945年1月23日の爆撃の「功績」を称えて、Northrop氏の部隊がDistinguished Unit Citation（優秀部隊殊勲章）を表彰されました。（戦後、その賞は大統領殊勲賞と名称変更されました。）

1945年1月からサイパンの司令部のトップであったGeneral Hansell（ハンセル）からGeneral Curtis LeMay（ルメイ）に変わりました。そして、今までB-29の昼間高度の軍関係工場等の爆撃作戦と違った、LeMayが試案した夜中に低空飛行で都会を爆撃する戦略に変更されました。その最初の攻撃は、3月9～10日の東京空襲でした。その後で、上に書いてあるように、私たちの自宅宛にDouglas Northropからの手紙が届きました。サイパンの新しい環境などと、東京攻撃について触れました。今から考えると何か悲しい気持ちになります。

そして、同年4月から、米軍の沖縄上陸が始まりました。その作戦を援助するために、Northrop氏が指令した第499部隊が都会攻撃から暫く中断され、九州にある日本海軍航空基地を爆撃する任務に集中しました。

この部隊の1945年4月22～28日の九州爆撃「功績」も「Distinguished Unit Citation（優秀部隊殊勲章）」を表彰されました。その一つの目的地であった出水海軍航空基地と出水海軍航空隊（いずみかいぐんこうくうたい）当時の記録によると「昭和20年（1945年）4月8日にB-29による出水海軍飛行場への爆撃開始。28日まで計8回実施。」

実は、1945年4月27日の朝、Douglas Northropがサイパンから出水海軍航空基地に向かったB-29が、サイパンから380キロほど北にあるAgrihan Island（アグリハン島）の近くで墜落しました。片エンジンに火が付いたため、乗組員が全ての爆弾を落下したあと、本体が危険になったので、みんなが脱出しました。Northrop氏以外は、米海軍空海救助隊（Navy/Army Air-Sea Rescue）によって救助されましたが、救助隊がその周辺を二日間探しましたが、とうとう僕たちに親切したDouglas Northropが行方不明者となりました。その日には、彼の戦争が終わりました。

彼が行方不明になったお知らせが（上に記されたように）1945年5月中旬ごろ彼の両親から私たちの家に届きました。その悲しみは未だに胸に残っています。

その出来事から16年後に、私と古田陽子の結婚式が名古屋中央教会で執り行われました。その教会も1945年にB-29によって空爆されました。そして、後で分かったもう一つの悲しいことがありました。Douglas Northropが行方不明になった10日前に、陽子のお兄さんがビルマの日本軍の負け戦に巻き込まれて、RangoonとMandalayの間の小さい村を通る時に、英国の戦闘機に打たれて、戦死しました。妻の陽子は私と同じような悲しみを未だに抱えています。戦争の悲劇が国境を越えています。

真珠湾の50年後のもう一つの出来事

約30年前に、私たち夫婦が宣教師の帰国活動として、ミシガン州の教会を訪問する途中で、ある日曜日の朝早く、小さい町の教会礼拝の前にその日曜学校を訪ねました。子どものクラスをはじめ大人たちの各クラスに挨拶しました。その町にはヨットが浮かぶ小さな美しい湖があり、そうした環境に憧れてリタイア生活を過ごすべく、引っ越してくるお年寄りも多い地方でした。そして、あるお年寄

りのクラスで日本の教会活動に関する話をする予定になっていた。

ところがそのクラスの部屋に入り、案内してくれた係員が私たちのことを紹介してくれても、席についていた老婦人たちはシーンと静まりかえったままでなんの反応も示そうとしない。(どうしたんだろう?と私たちが思った。) アメリカ社会では、このような場合には遠来の客を温かく迎えるのが一般的である。しかし、その場の雰囲気はまったく逆だった。やがてその理由が、一人の白髪の老婦人の言葉でわかった。

「実は、今現在、私たちと同じ部屋に日本人と一緒にいるという状況は、私たちの生涯を通じて初めての体験なのです。」

多くの婦人たちは、それでもおし黙ったままだった。彼女は、こう続けた。

「この町には、アメリカ海軍の関係者のリタイア組がたくさん住んでいます。私たちの仲間の中には、真珠湾でご主人や友人を亡くした方もいます。」

そこで私はようやく、この場のただならぬ雰囲気を理解することができた。数十年以上前に戦争は終わったというのに、当時からの日本に対する変わらぬイメージを抱き続ける世代がいたのである。かつて彼女たちは、日本は恐ろしい国だと教えられ、それ以降、たった一度も日本人に接触することもなく暮らしてきたのだ。

出会いがない以上、いったんここに刻まれたイメージを変えようと思っても、そのきっかけすら生まれえない。だからこそ、生まれて初めて目の前に登場した日本人である私の妻を前にして、彼女たちはどんな態度をとればいいのかわからなくなってしまうのです。

その時、妻の陽子は、あの戦争で自分の兄もビルマで戦死した話を始めた。そんな話を通じて老婦人たちも、たとえどんな国であろうと戦争は痛みと憎しみをもたらすものなのだ、ということを示すだけでも理解してくれたようだった。

今の若い世代には想像が付かないかもしれないが、このように数十年にもわたって互いの関係を遮断し、相手のことを知ろうとしなかった世代もいるのだ。こうした世代との交流は、それこそ数十年も前にさかのぼった段階から始めなければならぬのである。この丁寧な作業こそ和解と平和への道です。

マリアナ諸島が B-29 の本拠地になるまでに

三つのマリアナ諸島、いわゆるサイパン、テニアンとグアムを B-29 の本拠地にするために、そこに駐屯していた日本軍の勢力を撤去しないと、必要とする B-29 の滑走路の工事が始まらない。その滑走路の整備ができれば日本本土の本格的爆

撃が開始できます。先ず、サイパン戦は1944年6月15日から7月9日まで、日本人の被害者は、日本軍の30,000人中24,000人の死亡者の他に、約5,000人が自決して、921人が捕虜となりました。そして、約22,000人の民間人が死にました。そのほとんどは自害でした。アメリカ軍の被害は、約3,000人の死亡者、その他に13,000人の負傷者が出ました。

次は、Saipan（サイパン）の近く、同年7月24日から8月1日までに Tinian（テニアン）戦が起こった。そこにあった日本兵8,500人中、生き残ったのはわずか313人でした。米軍は、わずか389人の死者と1,816人の負傷者でした。その後、Guam（グアム）も被害の多い戦いに転回されました。日本兵の死亡者は18,337人、捕虜は1,200人でした。米兵は1,783人の死亡者と約6,000人の負傷者がありました。

その結果、この三つの島はB-29の根拠地として第21爆撃司令部の五つの爆撃連隊（Wings）が滞在することになりました。Northrop氏が属した73爆撃連隊（Wing）がサイパンに配備されました。他のWingはテニアン島に二つのWingとグアム島にも二つのWingが配備され、合わせて、1,000余機のB-29がその三つの島に配備されました。その位置は、日本本土を爆撃するためのB-29が往復出来る5,200キロ範囲内でした。

テニアン島のチャブレンと私たち

1945年8月に、広島と長崎に投下された原子爆弾を運んできたB-29がテニアン島から離陸しました。その時一人のメソジスト牧師 Rev. Fred Anderson がテニアン島で米軍のチャブレンとして任務にあたりました。数年後にこの牧師と出会うこととなります。

それは、1962年6月ごろ、私は4年ぶりに日本から帰国しましたが、その4年の間に私の兵役拒否者としての兵役に変わる奉仕活動の義務を果たしました。帰るところは、両親がカンザスから引っ越ししたばかりのイリノイ州のRockford市でした。妻陽子にとっては、初めてのアメリカ生活が始まりました。先ず、私の仕事を探すことは優先事項でした。近くシカゴなどで色んな可能性を探りながら、北イリノイ州の4つの教会の副牧師としての提案がありました。幸いに、その条件が私たちのニーズに合いました。古い牧師館を改修するという話もありました。ところが、その4つの教会の主任牧師はFred Andersonでした。（彼がテニアン島で米軍のチャブレンであった事実が後で分かりました。）

私たちがその新しい仕事を最終的契約する前にAnderson牧師が一つの条件を提案

しました。その内容は、4つの教会の会員が副牧師の日本人である妻を受け入れるかどうかを問うということでした。それに対して、私たちは、先ず、それぞれの教会の方々と直接会って、その後で、私達を認めるかどうかを検討してほしい。アンダソン牧師が私たちの提案に従いました。その結果は、私たちが満場一致で受け入れられることになりました。すぐその後で、私達の最初のこどもが生まれました。長女のマリでした。

その後、私がそれぞれの教会を訪ねるたびに、皆が、「陽子さんはいかがですか」と尋ねる。その意味は、私より、陽子とマリと会うのをいつも楽しみにしていたわけでした。数年後で、アンダソン牧師と再会した時、彼が話したのは、私たちとその2年間一緒に仕事したのは、彼の生涯の中で一番楽しい有意義な時でした。私たちも、その時の彼の友情を未だに感謝しています。

ウイントミュート先生が残された平和への思い

私の最近の責任は、2016年から2020年の4年間の山梨英和学院の理事長でした。（その間、臨時大学長や院長も務めました。）その学院の最初の宣教師はカナダ・メソジスト教会婦人宣教師局から派遣されたサラ・アグネス・ウイントミュート先生でした。彼女のことを最後に紹介したいと思います。

ウイントミュート先生は、初めて来日した135年前の1886年21歳の時から日本で亡くなるまで、一貫して平和主義者でした。イギリス系カナダ人としては、先生は第一次世界大戦が起こった時、ヨーロッパにおけるキリスト教国同士の戦争に対して大変心を痛められました。その思いを機に日本とカナダの間に平和のための懸け橋になることを決心しました。

そして、太平洋戦争勃発後も、家族の帰国要請にもかかわらず、帰国することはなかった。今から76年前の1945（昭和20）年6月、東京駿河台のニコライ堂内・仮設病院において81歳で召天されました。

ウイントミュート先生と同じ「平和への夢」を共有することにしましょう。世界中の武器が平和の道具になるための夢。そして、その武器が医療の道具に、農業の道具に、教育の道具に、道と橋を建設するための道具になる夢を実現するために決心しましょう。

アメリカの元大統領 John F. Kennedy が同じような夢を描きました。

“War will exist until that distant day when the conscientious objector enjoys the same reputation and prestige that the warrior does today.”

「良心的兵役拒否者」が、今日の軍人と同じような好評判と名誉を受け取る
遠い将来の日まで、戦争は続くだろう。」

その「戦争が終わる日」がなるべく近い将来に來ますように祈りたいです。

〈参考文献〉

「ワンダフルディファレンス」 ジョージ・ギッシュ著者、学習研究社、2004年、(126-146; 212-214 ページ)



子どもの頃8歳のジョージ・ギッシュ



イェール大学時代の Douglas C. Northrop
(1913.7.2.-1945.4.27)
Douglas C. Northrop at Yale University



制服姿の Douglas C. Northrop
Casual Photo of Douglas C. Northrop
in Uniform